釜ケ崎 1985年越冬

協友会
通信6

釜ケ崎キリスト教協友会

不思議な公園

堀　剛

ここは不思議な公園だ
何百人もの行列に誰一人割り込む人もなく
配られる一つの餅に正月を確認する
寒さしのぎに火を囲む
一杯の雑炊をすする
古着を分け合い
ロボットどもに包囲され野宿する人が六百人

ここは不思議な公園だ
入る人は
既に六百機のロボットどもの機械的視線を無視してきた
出ようとする人は
六百機のロボットどもと口論せねばならない
日本国憲法二十一条と
あるいは全条文について

ここは不思議な公園だ
六百個のジュラルミン楯と警棒が歩く
足音は天皇の軍隊のリズムである
だから、僕は精一杯にらみつけている
リモート・コントロールと
コンピューター制御されたロボットの構造が知りたくて

ここは不思議な公園だ
包囲する側の暴力と
包囲される側の貧しい人々の良心があって
この公園にたたずむだけで
機動隊の撤き散らす政治的意味が
君にも再発生する
一九八五年一二月三十一日から八六年一月三日
僕の見た　この日だけでも
釜ケ崎　三角公園では

もくじ

詩　不思議な公園 ……表紙裏

釜ケ崎の冬 '85～'86日録 …… 6

協友会と '85年冬

- 長く果てしない戦いにも光がみえる…2
- 夜間パトロール報告 …… 16
  — シノギ屋・救急車・仕事
- パトロール参加者の声 …… 20
  — 野宿する労働者群

● 寄場の冬'85～'86

山　谷　映画「山谷」と2人の監督…… 8

釜ケ崎　切り捨てを許さない闘いを…… 10

炊き出し活動の中から …… 14

京　都　第1回京都越報告 …… 12

笹　島　笹島労働者会館 …… 14

● 第11回越冬セミナー …… 22

協友会通信4 …… 24

協友会通信5 …… 26

新聞切り抜き …… 28

巻頭言　6月・アブレ …… 1

カンパ支援感謝 …… 30

協友会　釜ケ崎
通信6　1985年越冬

6月・アブレ

今は、6月である。年末からの日雇労働者にとってのきびしい寒さ、年末年始のアブレ（失業）期、ドヤの高級化、古紙の暴落。高齢労働者、労災などで体のゆうことがきかなくなった労働者はもちろんのこと、健常な労働者にとってもきびしい冬がその気配を全く見せなくなった…とたんに4月～7月のアブレ地獄が日雇労働者を待ちうけている。野宿を余儀なくされる労働者。炊き出しに並ばざるをえない労働者も一気にふえる。仕事にアブレた労働者、野宿に追いやられた労働者、炊き出しに並ぶ労働者を見て、差別、偏見の気持ちを持つ人もまた一気にふえるのではないだろうか。越冬が終ったからといって何かが良い方向に変わっただろうか。天皇がくるといってキタ、ミナミでは野宿を余儀なくされた労働者は、「あっちへ行け」と追い散らされ、英国の皇太子、ダイアナ妃がくるといって京都でも追い散らされ、どこにも気持ちを落ち着かせる場所もない。

追いやられ、囲い込まれ、使い捨てられ、差別され、そして必要とされている。何が本当に必要なのか。何が本当に大切なのか、学歴、外見、地位、名声、みてくればかりが同じ人間を判断する基準になってきている。そんな中で釜ケ崎にかかわる我々が教えられる事、変えさせられる事を、具体的に行いを通して示していかなければならない。

今の社会の中できれいごとばかりを言っていてもらちはあかないし、何も変わらない。

高見　忍

第16回釜ケ崎越冬闘争支援を終えて

長く果てしない戦いにも光がみえる

一　はじめに（越冬闘争基本方針）

第16回釜ケ崎越冬闘争支援活動も3月16日の総括集会をもって一応の終りとなりました。毎年のことながら越冬闘争を物心両面にわたって支援して下さいました全国の多くのみなさまに心からお礼を申し上げます。本年はこの闘争の中心となる釜ケ崎日雇労働組合の活動が一月十日をもって終了しましたので、それを引きついだ釜ケ崎キリスト教協友会の越冬活動期間は例年より長くなりました。釜ケ崎日雇労働組合は長びく不況の折り主力を本来の労働運動に向けて行かねばならず、キリスト教協友会は越冬活動を労働組合から全面的に引き継ぐことにいたしました。しかし一月十日過ぎれば医療センター前に蒲団を敷くこともできませんし、毎晩続けるためには人手や毛布など多くの援助が必要となってきます。本当に多くの人々が犠牲を払ってよく支えて下さいました。カンパで、物資で、奉仕活動で夫れ夫れに参加して下さいましたみなさんご苦労さまでした。

今年の越冬闘争の基調となる釜ケ崎日雇労働組合の活動方針は十二月十四日の第16回釜ケ崎越冬闘争支援連帯集会で方向づけられました。そのときのスローガンは国策事業動員阻止！青カン者差別カリコミ糾弾！　天皇、日の丸攻撃を打ち砕け！でした。このスローガンの中に日雇労働者が置かれている今の立場がよく表われています。

一昨年から釜ケ崎の日雇労働者の人口は増し始めました。同時に仕事の求人も増えてきました。しかしその仕事の内容は圧倒的に土木建築部門が増えて全体の九十％に及ぼうとしています。従って求人の内容は若い人を歓迎し、老人や病弱労働者を敬遠します。老人や病弱労働者、障害者の方々にとっては以前より厳しい就労状態なのです。更に土木建設の内容は関西新空港、関西学研都市建設・国鉄分割民営化など、国策事業を推進するのに関連したものが多くなります。労働者派遣事業法が成立することによって益々労働戦線は国家の政策に統一され、全民労協に象徴されるように戦時中の産業報国会のようなものが復活して戦時体制への動員が着々と準備されて行くのです。関西新空港建設の先取り工事として釜ケ崎ではドヤ・ビル（ビジネス・ホテル）の新築ラッシュがつづいています。最近では六〇％が鉄筋高層の建物に衣替し、それに伴いドヤ代も千五百円から高いところでは四千円にまではね上ってしまいました。仕事の少い老人、病弱者にとって最悪の状況です。これでは全員青カンを強いられているのと同じです。

しかも日雇労働者が青カンを余儀なくされていると今度は「浮浪者」と呼ばれ警察の手によって狩り込まれてしま

います。

横浜での青カン者差別虐殺事件・東京板橋での青カン者差別虐殺・宇都宮病院への「精神障害者」の寄場からの狩り込みと差別虐殺・京都駅青カン者差別狩り込みは国策事業動員政策と表裏一体の攻撃として表現されたもので、釜ケ崎の寄場労働者に対しても例外ではありません。

又山谷で先行し激しくなっている天皇主義右翼と労働者との対決。これは単に労働者とヤクザの対立といったものではなく、寄場労働者と国策事業に動員するためにも、日雇労働組合を封じ込めてしまう方針がこうした右翼暴力団を用いての対決となり、労働運動を力で押えてしまおうとしているのです。「地域浄化」のスローガンのもと、又、「国を愛し守る」という名目のもとに天皇の名を用い、日の丸の旗をかかげて全国の寄場で差別、排外主義攻撃が一挙に煮つゆられて行く現象を私たちは見逃してはなりません。

二　対支行政交渉

路上に一人も死者を出してはいけない。釜ケ崎は働らくものの街として労働者一人一人の人権が守られ、働らく権利が保たれなければならない。臨調行革を盾にして労働者を死に追いやってはならない。できるだけ就労状況をよくし、どうしても仕事につけない労働者には衣食住を確保するのは行政の責任である。決して民間の善意に押しつけてはならない。以上の信念のもとに釜ケ崎キリスト教協友会は第16回釜ケ崎越冬闘争実行委員会と共に昨年十一月大阪市に要望書を提出いたしました。

一、臨泊入所数を千五百名以上保証せよ
　釜ケ崎の中に常設臨泊をつくれ
二、入所について、雇用保険手帳の有無、及び「現在の」職業を問わない事
三、入所期間制限の廃止
四、年明け就労期の早期バスの大巾増発
五、高齢就労不安定層については就労できるまでの宿泊手段を新設せよ
六、治安隔離収容政策を一切廃止せよ
　警察の駐留、ガードマン、鉄条網の廃止、訪問、面会の無条件保証
七、民主局は越冬期の全市内の野宿者総数を調査しろ
　冬期の入院入寮の大巾増員対策をとれ
八、医療施設及び医療水準の低下を防止せよ（レベルアップ）させよ
九、隔離収容主義の精神病院の改革をはかれ
　患者の通信、面会の自由を回復させよ

これらの要望は無理なものではなく、野宿を余儀なくされている日雇労働者が人間らしく生きるための最低の条件にすぎません。しかも、今の日本の経済レベルからすればやろうとすれば直ぐにでもやれるものなのです。しかし、十二月二十三日の対市交渉は空しく実のないものでした。市からは民生局保護課の二人の係長と環境保健局衛生係長が出席、約二時間半にわたって話しあいがなされましたが何ら積極的な解答を得ることはできませんでした。

要望する側は苦しむ労働者の状態を訴えて、その解決策を求めました。その奥には現実にたずさわったものが自分の無力を悟るだけではなく、国が共にやろうとしなければ問題は解決しないとの確信がありました。しかしそれに対

して行政側はあくまで管理者として考え、「訴えていることは解る。しかし予算がない以上、どうしようもない」の一点張りで応答します。

人々の苦しみに対して民間と行政が一体となって運動することは不可能なことなのでしょうか。行政側の「解るがしかし……」的返事を聞いていると行政は国民の訴を信頼していないのではないかとも考えざるを得ません。

行政につきはなされたばかりでなく逆に連日の機動隊に見張られるような形で十二月二十五日の夜から越冬闘争が始りました。一人も凍死者を出すまいと連日連夜の苦労が展開されましたが犠牲者を出してしまいました。越冬闘争の総括も終わり、越冬報告書の準備をしている五月七日、三角公園で無縁仏の慰霊祭が行われました。昨年一年間に路上に、或いは病院に運ばれて直ぐ死亡し、縁故者がいないためにお葬式をして貰えなかった人々の慰霊祭です。

三角公園のステージに設けられた仮祭壇を供花で飾り、僧侶も十人位で読経が行われましたが二十分位で終りました。日頃釜ケ崎には姿を見せない関係者が黒の礼服で並んでいるのも異様でしたが、日雇い労働者の参加の少いのも印象的でした。その時発表された無縁仏は一一〇柱でした。即ち昭和六十年度、釜ケ崎の関係での行路病死者は、四九四名でしたが、その中の一一〇名は縁故者が遺体を引取ろうとしなかったのです。昨年度の七四柱に比して三六柱も増しているのです。慰霊祭の中で執行委員長が「今日祭られた柱はみな日本の高度経済成長を第一線で荷って来られた方々で」と挨拶しているのが何とも冷く響いて来ました。日本の経済成長を支えた日雇い労働者が遺体の引き取り手のないままに無縁仏として葬り去られていくのです。

三　この冬を振返って

越冬闘争を振返ってみるとこの冬もいろいろなことがありました。苦しい暗いニュースもありましたが、その中にも光が射し込んだような明るいニュースもありました。

越冬が始まろうとする十二月九日、十日には釜ケ崎差別と闘う連絡会の呼びかけで、第一回釜ケ崎現地調査が行われました。この調査は学者や文化人が集って釜ケ崎問題を学問的な面から取り上げるためにまず現場に足を運んで体験することを目的としています。桃山大学の学長沖浦和光氏を団長とした調査の様子はN・H・K、毎日テレビ、朝日テレビが放映しましたが、特に団長は「働らく人がこのような状況に追いやられていることに学問をするものの責任を感じる」と話していました。このような調査が二次三次と続けられ、釜ケ崎問題が現代日本の病める社会構造の傷口が吹き出ていることを実証的に取り上げられ、学問的に解明され、全ての人々の民衆的努力によって解決されることを望みます。

十二月二十五日より越冬闘争が始りましたが、決起集会に先立って映画「山谷ーやられたらやり返せ」が上映されました。昨年十二月二十二日、山谷での右翼暴力団、皇誠会ー西戸組との闘争の中で、暴力団組員（テロリスト）筒井某により殺された佐藤満夫監督の遺志をひきつぎ一周忌に間に合うように完成をされた映画です。寒さの中に立って震えながら見た映画には迫力がありました。佐藤さんが殺された直後の場面、山谷の朝の労働者の就労状況、働いている労働者の誇りある姿、仕事が終って仲間と一杯のみながら談笑する姿、しかし他方アブレの著しい冬、行くと

ころがなくて捕虜収容所にも似た臨時宿泊に入ろうと並ぶ長蛇の列、そしてやっとの思いで臨宿に入るとき突然のように聞えて来るシューベルトの「冬の旅」、ドイツ語で歌われているのが印象的でした。又日雇い労働者の中には、昔炭鉱で働いていた人々の多いことを知ってカメラは筑豊にまで飛び、ボタ山を映し、廃抗と共に無人となりボロボロになってしまった炭鉱夫宿舎を映します。炭鉱夫の中には強制連行された朝鮮人労働者が多く、その人々が今に歌いつづけている望郷の歌。「われらの故郷は慶尚北道なのに、私はどうして石炭堀りにきたのか、日本がいいとだれが言ったのか、日本にきてみればひもじくてたまらない……腹がへったよ　母さんに会いたいよ　涙を流して手紙を出したよ、母さんのもとから米粉送ってきたよ……米粉を口に入れ　涙ながらしながら「母さん」と呼んでみた……あちこちで死んだ者は多かったが、葬式を出すのは一度も見なかった。」風の寒さをかみしめながら歌ごえをきき、捨てられるように亡くなった朝鮮人労働者の石ころのようなお墓をみていると戦争の傷は未だにいやされず、しかも日雇い労働者の街に活きていることを思うのでした。しかし暴力団やそれを守る機動隊にも負けずそれに打ちかって行く労働者の姿をみていると最後に勝つのは民衆の力だと、深い確信にみちた力強さをも感じるのでした。同じことは機動隊に囲まれている釜ケ崎の日雇い労働者の団結の姿をみたときも思いました。力で人間の真実の声を押えつけることはできません。

年末年始の釜ケ崎は例年のように野宿を余儀なくされた労働者で溢れましたが、今年は昨年に引きつづき三角公園を拠点にして、三十一日の夜には年越そば、一月一日は、のどじまんに寸劇、二日はもちつき大会、うた合戦、三日ソフトボール大会、四日、対市抗議デモと労働者の力のあふれる冬まつりでした。

第16回越冬闘争実行委員会主催のパトロールが一応終了し、春の労働闘争に取組みを始めようとしている一月十三日の朝、又もや悲しみと苦しみのニュースが伝わって来ました。山谷日雇労働組合の指導者で、佐藤監督亡き後、その遺志をついで山谷の映画を完成させた山岡強一さんがテロリストによって殺されてしまったのです。午前六時二十五分、新宿、戸山ハイツの自宅から友人と新大久保駅に向う途中、待伏せしていた日本国粋会、金町一家によって、ピストルで射殺されました。一本の映画の二人の監督が殺されてしまう。労働者の労働条件のために立上っている者を同じ日本人が邪魔者扱いにして殺してしまう。しかもその奥に日本特有の右翼の、天皇のため、日本の国を守るためにとの大義名分がある。しかもその事実を気にも留めない人々の方が多いということは、益々軍事化に進んで行く日本の足音に拍車をかけることになるのではないでしょうか。

しかし二月二十五日のフィリピンのマルコス独裁政権崩壊、アキノ新政権樹立のニュースは人々に光をもたらしました。真理に対する民衆の力、人々の団結は、非暴力によって暴力に打ち勝つことへの確信をもたらしました。

越冬が終って改めて民衆の力が世の中を変えることを信じて歩みを新たにしています。釜ケ崎キリスト教協友会も越冬総括の合宿を行って、越冬に参加して下さった人々への感謝を示しながら、更に進む決意を固めました。

これからもよろしくお願い致します。（蒲田　昇）

釜ケ崎の冬　一九八五年～八六年日録

一九八五年

10月6日　協友会10月例会
越冬小委員会を人員補充のうえ結成。

7日　生活センターを創る会より大阪市に署名提出

20日　三角公園にて映画会開催　四百～五百名の出席を得る。

27日　名古屋　笹島労働者会館オープン

11月3日　協友会11月例会　今月より越冬に備え、例会は月二回となる。
協友会越冬小委員会、今年度も支援の目標を昨年に続いて「宿のない人に宿を」「仕事のない人に仕事を」「食のない人に食を」「病気の人を病院に」と決定。

11日　京都越冬闘争実行委員会結成集会がおこなわれる。

17日　協友会11月第2回例会

23日　喜望の家　落成式

25日　第十六回越冬闘争実行委員会が行なわれ、協友会も陪席。
パトロール日程。医療、警備、炊事等についても協議。

28日　協友会と越冬実が連名で大阪府・大阪市に要求書を提出

30日　京都越冬闘争実行委員会拡大会議　於京都部落解放センター

12月1日　炊き出しの会が越冬体制に入る。一日三食の炊き出しを始める。

1日　協友会12月例会

2日～7日　越冬闘争支援呼びかけ文を西日本の教会、学校、個人に約四千通発送。

9日～10日　釜ケ崎差別と闘う連絡会の呼びかけで第一回釜ケ崎現地調査が行なわれる。朝日新聞、NHK、ABC、MBSテレビ等で紹介される。

11日　京都越冬闘争突入決起集会
於　京都部落解放センター

12日　京都キリスト教越冬闘争実行委員会が越冬学習会を開く

14日　第十六回釜ケ崎越冬闘争支援連帯集会が大阪・部落解放センターで行なわれる。

15日　協友会12月第2回例会

17日　在世フランシスコ会「出会いの家」オープン
西成市民会館にて映画会を土鳩の会（協友会）が行なう。参加約80名

19日　協友会から阪奈病院の全入院患者四七〇名にクリスマスプレゼントを贈る。

20日　京都越冬闘争突入
人民・医療パトロール、労働・医療相談、臨時宿泊所内諸活動、情宣活動に取り組む。

23日　三角公園にて、クリスマス・キャロルの夕べ（チネカ神父・生活相談室入佐共催）を行なう。約六十名の労働者が参加。

25日　越冬突入集会　於三角公園
映画「山谷」上映。

26日　第十六回釜ケ崎越冬闘争実行委員会が1月10日までの闘争に入る。医療・生活・労働相談・

布団敷き・夜間パトロール、警備など。協友会はパトロールを支援する。

12月29日　大阪市の越年対策、無料臨時宿泊所、受付が始まる。約七七〇名の申込に対して、約三一〇名の入所のみ許可される。約三六〇名が切り捨てられる。

29日　越冬実越冬中間報告集会

1月3～31日　第十一回越冬セミナー（協友会）テーマは昨年に引き続き「いま釜ケ崎で」。参加14名。

一九八六年

1月1日　越冬実主催「越冬祭」で、のど自慢大会等が三角公園で行なわれる。他に、支援物資の配布等行なわれる。

2日　もちつき大会、ロックバンド等の催しがある。

3日　三角公園を約五百名の機動隊が包囲する中、人民パトロールは京都越冬闘争に勝利号で参加。

4日　南港臨時宿泊所で労働者が急死した。

5日　大阪市役所へ百二十名で抗議

協友会1月例会

パトロールの内容について検討。

10日　越冬実主催、越冬闘争終わる。

11日　協友会を中心とする、キリスト教夜間パトロール始まる。連日午後十一時半より午前一時半まで、みそ汁、カイロ、毛布、衣類等を二月末まで配布。

13日　山谷にて映画「山谷」の二人目の監督山岡強一さんが暴力団日本国粋会金町一家に射殺される。

16日　山岡強一さん追悼、山谷労働者葬（東京・玉姫公園）。

19日　協友会1月第2回例会

パトロール中に救急車を呼んだときには、後日病院訪問等のアフターケアをすることを確認。

27日　新今宮小中学校跡地利用について大阪市と話し合う。（生活センターをつくる会）

2月2日　京都越冬闘争実行委員会は85～86年の京都市の〈越年対策〉をめぐって京都市民生局と話し合う。

2日　協友会主催　越冬パトロール中間報告集会　於阿倍野カトリック教会。映画「山谷」のプロモーション・フィルムを見て、入佐さんより「釜ケ崎とわたし」というテーマで講演を聞く。参加約七十名。

5日　大阪弁護士会の人権擁護委員会より弁護士が来釜、釜ケ崎地域内の十六台のテレビカメラについて人権侵害の可能性を調査。

11日　西成区の東洋アパートの火事で老人等6名焼死。

27日　協友会関係者のための「山谷」上映会を喜望の家で開催した。参加約百名。

28日　協友会夜間パトロール終わる。期間中、救急車で病院へ送った労働者十名中、そのまま入院できたのは二名だけであった。使用した毛布約二千枚。期間中、医療相談、病院訪問等は継続。

3月16日　協友会主催　越冬報告集会

於ふるさとの家、十年前の釜ケ崎越冬のスライドを見て、総括の話合いを持つ。

4月13日　86年度協友会合宿、宝塚黙想の家で二二名参加。協友会の年間計画、報告、各施設の問題などを話し合った。

寄場の冬'85～'86

日本の寄場・東京山谷・名古屋笹島
大阪釜ケ崎・そして京都は

「山谷―やられたらやりかえせ」と二人の監督

釜ケ崎の越冬も、ひと区切りつきだした今年の1月13日、山谷争議団―日雇全協（全国日雇労働組合協議会）のリーダー格であり、山谷のドキュメンタリー映画『山谷―やられたらやりかえせ』の、実質的な監督であった山岡強一さん(45)が、虐殺された。彼は、家族のもとから山谷へ向かおうとしたところを、至近距離から四発もの銃弾をあび、即死状態だったそうだ。

山岡さんを殺した下手人は、佐藤満夫監督を虐殺した犯人筒井同様、山谷での寄せ場支配をもくろむ、日本国粋会金町一家のテロリスト、金竜組の保科勉である。

『山谷―やられたらやりかえせ』を撮影し始めた佐藤監督は、一ケ月もたたぬ一九八四年12月22日に、刃物で背後から刺され、命を落とした。怒りと悲しみの中から山岡さんが、佐藤監督の遺志を継ぎ、最後まで佐藤満夫監督作品として映画を完成させた。山岡さん自身が、佐藤監督虐殺の怒りを胸に、全国で上映会をする予定であった。

一本のドキュメンタリー映画を完成させるまでに、二人もの監督が殺されたという事実。二人の命を奪ってまでも、映画を完成さすまいとする「力」とは何であるのか、我々はこのことを、しっかりととらえておく必要があるだろう。

山岡さんが友人に宛てた手紙の中に、このドキュメンタリーの持つべき「前提」として9つのことがらが書いてある。

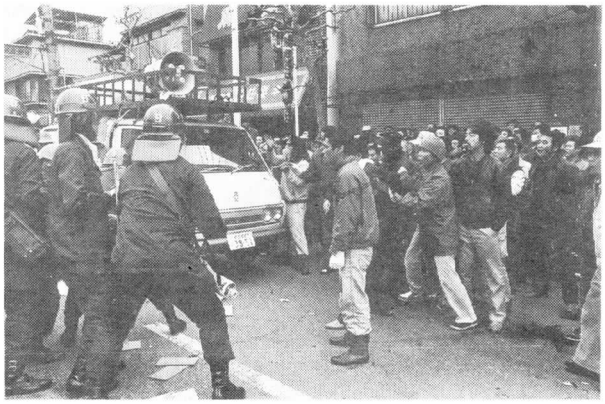
①一九八四年12月22日佐藤監督虐殺の事実。②それは山谷の現在、③同時に今日の時代状況　④しかも、労働者支配から労務者支配への開始。⑤この搾取と支配の二重構造化の中に加速化される差別の現実。⑥それを統合―統治するものとしての天皇制。⑦天皇制という日本主義と資本自体の運動法則からする越境の亀裂は、侵略戦争を必然化。⑧しかも、この支配権力の本質は、朝鮮、台湾に対する植民地化支配とアジアに対する侵略戦争の延長　⑨従って、労務者支配と強制連行は天皇制と侵略戦争動員を撃つものとして、捉え返さねばならない。（原文のまま）

これらの「前提」が映像の中に写し出されていれば（私自身、十分映像の中に表現されていると思うが）、まさしくこの映画は、ある人たちにとって、制作者を殺すに足る内容であろう。

ある人たち

ある人たちとは―。それを探るのに、とりあえずこの間の山谷での状況を知る必要があるだろう。

日本国粋会金町一家が、山谷に武装登場したのが一九八三年の秋で、この当時、金町一家西戸組は、「大日本皇誠会」を名のり、〝ヤクザ〟としてではなく、「天皇主義右翼」として登場している。このことと共に、金町一家の上部組織である〝日本国粋会〟も又、昔から有名な右翼団体であることを、覚えておく必要がある。もともと金町一家は、自称〝博徒〟（バクチ打ち）の集団で、主に路上バクチやドヤ内でのバクチ、公営ギャンブルのノミ行為等、いわゆる〝博徒〟の顔と、一方では山谷と隣接している吉原（ソープランド街）でのポン引き（売春あっせん）や、フィリピンをはじめとする東南アジアへの売春ツアーの企画、東南アジアの女性を吉原に囲うなど、悪質な暴力団としての顔も持ち合わせていたが、山谷での就労過程（いわゆる手配師業）には、手が出せずにいた。ところが、今から数年前に運よく吉原の好景気にあずか



暴力団金町一家の拠点に対する山谷争議団と労働者の抗議行動から暴力団を守る機動隊

り、勢いに乗って山谷の寄せ場支配に乗り出すという、野望を持つにいたった。これが一九八三年の西戸組の登場となったと考えられる。しかし、右翼として登場したまではよかったが、そんなことでは動じない山谷争議団をはじめとする労働者一千名に撃退され、約半年後に、皇誠会の事務所は山谷から出ていくはめになった。その後、西戸組は再登場し、暴力によって手配師をまとめようとしたが、これも争議団と労働者につぶされ、追い詰められ、そして、佐藤監督虐殺、山岡さん虐殺と続き、状況は一気に煮つまった。この間に西戸組は解体されるが、なぜ金町一家が、こうまでして映画つぶし、争議団つぶしをするのか。これは、単なる〝ヤクザ〟の権利のみでは考えられない。

右翼のねらいは何か

しかし、この二年半の闘いの中で、多くの犠牲をはらいながらも、奴らは徐々に本性を現してきた。それは、実動部隊として手先をつとめる右翼ヤクザ。それを支える建設独占資本や、地域ボス。総ての計画と調査、そして事後処理を担当する浅草警察をはじめとする公安警察。これらが連合体を成していると考えられる。彼らは、争議団つぶしと、寄せ場制圧という点で、お互いの利益が一致する。

手先となる金町は、争議団をつぶして寄せ場を喰い物にしたい。建設独占資本は、争議団が無ければ低賃金で日雇労働者をこき使える。地域ボスは、争議団がなければ、自由に警察や政治家を動かし、山谷を整理縮少し、都市計画の際には暴利がむさぼれる。公安警察は一言わずとも知られるところだろう。

このことは、単に想像ではなく、数々の証言や資料によって確認されている。特に金町と警察のつるみは警察官に直接金を握らす事から始まり、山岡さんが殺された背景にも、公安が関与していたことがいくつかの証拠で示すことができる。

現在も尚、金町一家との闘いは続いているが、金町を追い詰めることによって、右翼としての本性をあらわにし、国家（天皇）の意向にそわない者は、『国家護持』の名の元で暴力によって排除されても同然、殺されても同然という風潮は、山岡さんを殺した保科の裁判でも弁護士の発言の中から聞かれている。

こういった風潮が、一体何を意味しているのか。今後山谷に又、釜ケ崎や全国の寄せ場にどんな波が押し寄せてくるのか。今後も、佐藤さん、山岡さんが命を張って作りあげた『山谷ーやられたらやりかえせ』を何度も自分自身にぶつけながら、考えていきたい。

映画「山谷」を見てください。

映画「山谷ーやられたらやりかえせ」は、東京の寄場山谷を中心に、日雇労働者の生活・歴史・闘いを描いたドキュメンタリーです（約二時間）。

この映画は、二人の監督佐藤満夫さん山岡強一さんによって製作されましたが二人とも天皇主義者暴力団によって殺されました。二人の死は、またこの映画の性格をよく物語っています。

上映希望の方は、左記の上映実行委員会までご連絡ください。

釜日労事務所 (06)六三二ー四二七三
旅路の里資料室 (06)六四一ー七一八三

切り捨てを許さない闘いを

はじめに

'85～'86越冬闘争は、全般の失業の深化を反映する釜ケ崎労働者の急増（'84・3月末・一五、六七三名⇒'86・3月末二二、四八五名＝アイリン職安有効手帖数）（スクラップ・アンド・ビルトの激化）と、飯場吸収の進行（日雇・寄せ場労働者の反動的管理支配）という釜ケ崎の基本動向と、侵略帝国主義を露わにした諸々の政治的反動（フィリピン干渉・反外登制運動弾圧・天皇在位60年式典・国鉄解体・失対打切り・精神衛生法改悪等々）や高齢者・弱者・下層労働者疎外・福祉切捨ての進行を情勢ににないつつ

(1)関西新空港その他の反動的国策事業への労働者動員と対決できる布陣を寄せ場を拠点に、現場・飯場につくっていく。

(2)寄せ場日雇への、特にアオカン者、高齢者・「障害者」への野垂れ死に、差別、保安処分、狩り込み攻撃と闘う。

医療センター前を後方陣地に、三角公園を前線拠点に、権力の越冬封じ込めを打ちやぶり、市内全域に流出させられたアオカンの仲間をも防衛する。

(3)山谷に先行する天皇主義右翼の寄せ場登場と闘い、日雇・下層労働者の「日の丸」の下への排外主義動員と闘う。

以上を三大任務と設定して開始された。

対市交渉

前段対市交渉においては「仕事がでているから臨泊は去年なみでよい。臨泊は釜ケ崎労働者対策」とする市側と「市の臨泊や福祉切り捨てがアオカン市内流出の原因。市内アオカンまで含めた越冬対策をとれ、行革前の規模にもどせ」という我々の対立点が鮮明となった。本来、盆正月はゆっくりと「第二のフルサト釜ケ崎で」という理想が、ドヤ代の高騰（春闘の成果を喰いものにする）、臨泊縮少、また年明けの就労不安によって飯場にとじ込もってすごすようになり、それすらできぬ膨大な層が臨泊の人員と期間の実質削減で「死んでもらった方がよい」部分として釜ケ崎地区・周辺・市内に厳寒の中にさらされる事態は年々深刻化して来たのである。

ポリ公包囲化の越冬闘争

府警、西成署は12月25日三角公園決起集会から空前の戒厳体制をしき、終始越冬の全活動に対して封じ込め、監視体制をもってのぞみ、あらゆる集団行動に対してむき出しの暴力をもって襲いかかった。越冬実は多くの負傷者を出しつつも、弾圧をすべて撥ね返しつつ、医療班・警備班・人民パトロール班・医療パトロール班・炊き出し班・文化体育班・労働班を軸に12月25日夜から1月11日まで越冬の闘いを、結集した多くの労働者と共に貫徹しぬいた。

今回越冬方針の軸

第一期（12／25～12／28）寝床・医療券・医療パト・炊き出しの保護活動開始

越冬まつりの1日――もちつき大会

第二期（12／29～1／4）臨泊切りすて労働者を結集し三角公園を拠点に反撃の闘いに転じる。同時に文化体育・炊き出しを軸に楽しくやる。第三期（1／5～1／10）新年への方向づけ＝入院・入寮・就労復帰と飯場闘争。

越冬の短期化を含めこの方針は①労働者を結集し、釜の年間闘争体制を特に、春闘準備を早くする②山谷闘争体制の早期再編②協友会や医療連に事後活動依存④年明け求人早期回復の楽観等の観点からである。

寝床と医療券・炊き出しの状況

今回は終始・昨年を上回るアオカン状況（臨泊しめ出しを含め）を反映し、越冬の寝床に集った人数も、通算医療券数も、炊き出しも昨年を上回った。差別的切りすてを一切許さない方針によって医療券による入院入寮率は約六割の高率をマークした。

臨泊入所の状況

市は自彊館の前段狩込みによって12月中に一五〇名を入院させ（越冬実のヘゲモニーくずし、と行政のアリバイづくりの為）12月29日・30日例年の如く、警察包囲の下、市職員・右翼学生・ガードマン・刑事一体協力の中で差別選別収容又は排除を行った。越冬実は29日・30日・31日にわたって、排除・却下された仲間を医療券によって再組織して入所闘争を行い、あくまでも却下を許さず、その殆んどを入所させた。

カロオジテの行革反撃であるが、この人数と前段狩込み数（本来、入院入寮していなければならない人）をのぞくと今年入所数は九四〇名とされているが、直接受けつけ入所数は七〇〇名を下回る。

総括のポイント

(1)三角公園拠点確立（攻撃的越冬闘争への第一歩）

(2)越冬テリトリーからは一人の犠牲者もなく貫徹（直前にT同志を失い、仲間の犠牲を出さない決意）入院・入寮・闘争前進

(3)臨泊縮少に充分反撃できず。然し人民パト医療パトの市内進出による反撃線の前進

(4)京都越冬闘争が初めて闘われた（反撃線の拡大）

(5)近年最大の労働者の主体的結集があった。

（越冬実・K）

パトロール参加者の声

海星病院　宮地淑子

あの日は、とても寒い夜でした。夜も更けたこの時刻には、道を歩く人影は殆んどない。掛け物も十分になく、肩を寄せ合うように数人が海老のように丸くなって寝ている光景。道端で何も掛けずにうずくまっている人。植木の繁みの中に、軒下にと所構わずゴロゴロと寝ている人達、霜が凍りついて月明りにアスファルトの道路がキラキラ光る。

月は冷たく星は冴える。これが釜ケ崎の夜ではないだろうか。リヤカーに毛布と救急箱とポットを積んで巡回する。温たかいみそ汁やホカロンを配る。道端に倒れている老人を発見。どうも普通ではない。瞳孔が不同で時々痙攣している。しばらく観察したが入院が必要と判断。救急車を呼んで病院へ送る。約一時間のパトロールであったがとても短かく感じられた。どん底の生活圏を見て大きなショックを受けた。夜の高速道路を猛スピードで走り、午前二時過ぎには神戸に着いた。

フンワリとした暖たかいベッドに入る。もったいない気持ちだ。つい先程の光景が目に浮かぶ。救急車で運ばれた老人は今頃どうしているだろうか。「ありがとう」と笑顔でみそ汁とホカロンを受け取られた老人は…。毛布を拒否し道端にうずくまっていた人は……走馬燈のように次から次へと想いめぐらしてくる。こんなことがあって良いものかと怒りの気持ちさえ感じる。しかし、高度成長下にある日本の現状でもある。この人達も高度成長を支えた人達なのだ。新幹線のトンネル掘り、高速道路作業、高層ビル建設などに肉体労働を提供した隅の親石ではないか。心に深い傷を覚えながら、自分自身や病院のベッドに眠る患者を思うと何と恵まれていることかと感謝と有難さをしみじみと感じる。

第一回京都越冬闘争報告

京都でも越冬闘争がはじまった

経過

10年前ごろから、京都・滋賀の青年・婦人らが中心となって、釜ケ崎越冬活動の炊きだし、夜間パトロールなどの支援を行なってきた。特にここ数年、越冬活動の準備会として救急法の勉強会、釜ケ崎医療ケースワーカーの講演会・スライド上映会などを行ない、より深い関わりを持とうと考えた。しかし、実際には年に一度、冬の期間だけの関わり、（週に一、二度の訪問）でしかなかった。つまり、釜ケ崎の現状を見つめることはできたが、その現状と我々が在住する京都の現状とのギャップを埋める作業が何らなされることがなく、釜ケ崎越冬支援が行なわれてきたと言えるであろう。

そこで、我々の足元である京都においての日雇い、底辺労働者のおかれている現状を知るために、'83年冬より、京都駅・四条河原町地下・円山公園などでのアオカン（野宿）労働者実態調査を行なってきた。主に京都東九条現場研修の参加者らが中心となり、アンケート・聞き取り調査などを行なった。そこで、京都駅においては、警察権力による年数回の一斉取り締りがあること、鉄道公安官や一般市民からの暴力やいやがらせがあることなどがわかった。また'84年12月23日の朝日新聞紙上で、同年3月から12月に七条署、鉄道公安室による「浮浪者」一斉取り締りが行なわれ14名ものアオカン労働者が逮捕されていたことが明らかになった。

この事実を許し難いアオカン労働者への差別であるととらえた釜ケ崎日雇労働組合、部落解放同盟京都府連合会、東九条地域生活と人権を守る会、釜ケ崎差別と闘う連絡会、日雇い労働者の人権を守るキリスト者の会の五者で、「日雇い労働者の人権と労働を考える会」を組織した。その後、「考える会」は、警察・公安室へアオカン者の排除要請をした京都駅への糾弾交渉、また、一斉取り締りに加担していた民生行政への糾弾交渉を重ね、今後は駅において、一切労働者の排除を行なわないこと、またそのような排除に協力をしないことを確認した。また、積極的にアオカン労働者への対策を進める会を、京都駅、下京福祉事務所、京都七条公共職業安定所、中央保健所、下京区役所と「考える会」で作ることを約束させた。

こうした経緯で、第一回京都越冬に向けて一人のアオカン者も「野垂れ死に」することのないように、行政越年対策のための越冬小委員会、「考える会」を中心とした京都越冬闘争実行委、京都越冬キリスト教実行委が結成された。

越冬活動

越冬期間中の活動は以下の班に分かれて展開された。以下活動報告と反省。

1. 夜間（炊きだし）パトロール班

＊期間中（12／20～1／10）常時30名程（最高50～60名）の参加で、主に2方面（①京都駅及びその周辺、②四条通り河原町へ烏丸地上・地下、円山公園、新京極界わい、三条京阪など）のパトロール活動、なお前段2回、期間後キリスト教越冬実を中心に2月末まで週一回（計7回）のパトロールを行なう。

＊反差別・治安弾圧（反狩り込み。排除）、生活・医療・労働（就労）相談等の活動を主に、アオカン労働者との交流・信頼関係の一定の確立等の成果を得る。

＊京都のアオカンの実態がある程度明らかになる――現役層に較べ病弱、「障害」、高齢層が多い。これは当初の予想とズレて、事前の医療体制（ベッド数の確保等）や福祉の体制の不充分さが露呈、また就労相談、就労復帰に対応できない面があった。（現実的に1月30日までの職安相談13名中労働復帰5名

で、アオカンに戻った人も多い）

2. 労働相談班

＊越冬闘争の中心的活動になるはずであったが、京都駅構内に相談場所を設置できなかったことから、日常的に労働者と話し合う場が奪われ充分に活動できなかった。

＊越冬突入時から、運動の主体となるべく京都を軸に労働している日雇い労働者層が不在であった。そのため十分な労働状況の分析がなされなかった。また、夜間パトロールなどで現役層の獲得をねらったが、京都のアオカン者の実態が、ほとんど病弱者・高齢者、「障害者」であったために不発に終わった。

3. 人民宿泊班

＊夜間パトロールで労働者と話合う過程で臨時宿泊所に入ることを希望した労働者が、次の日行政相談に行くために一泊する場所を維持した。

＊越年対策期間前（行政サイド）には、人民宿泊所に10名以上の労働者が寝泊りをし、アンケート・交流などを行った。

4. 情宣班

＊越冬闘争中のビラ、パンフ類の作成を目的とした。

＊ステッカーと5種のビラを発行したが、ほとんど越冬前半に限られた。対マスコミ、対「市民」、労働者情宣が極めて不充分であった。

5. 事務局

＊民生・労働行政との交渉にあたった。

＊「越冬小委員会」において、保護人員を50名その他病院のベッド確保、ドヤ券の発行などを要求していたが、結局、中央保護所20名プラスアルファと病院の15床のベッドが用意されたにとどまった。また、越年対策期間も、当初12月20日～1月10日までであったの、12月21日～1月3日と一方的に縮少させられ、その前後は「経常業務」の範囲とされた。

6. 病院・中央保護所訪問

＊入院・入所した労働者を見舞い、相談事などを話し合い、対処しなければならない問題にはすぐにそれにとりかかる活動をした。

＊12月31日にD病院にて、ある労働者が息をひきとった。これは労働者に対する差別的な医療体制によってひき起こされたといえる。しかし充分な追及ができてはいない。

＊充分に病院・保護所に対する監視ができていなかったために、追い出し、排除を許してしまった。

総括と今後の課題

以上のような経過で今回京都において、初めての越冬活動が行われた。第一回目であるという事で不充分な点が多々あり、残された課題も多いが、そのことをもって第2回の越冬にむけてこれからも地道に課せられた問題に取り組んでいきたい。

また、最後に、第一回京都越冬闘争に支援して下さった皆様にこの場を借りて感謝するとともに、今後の活動にも是非ご協力を願って第一回京都越冬闘争の報告にかえさせていただく。

（平田　義・記）

冬の炊き出し活動を終えて

炊き出し十年目を迎えた第16回釜ケ崎越冬闘争は一九八五年十二月一日より始まり一九八六年二月二十八日で終了させていたゞきました。例年にない多くの方々から支援カンパをいただき、本当に助かりました。有難うございました。

期間中は朝九時、昼一時、夜六時と三回の提供ですが、十二月総数一〇六〇七食、一月総数一六四六二食、二月総数一〇七四七食、全総数三七、八四六食、一日平均四二一食で、提供数最大だった日は一月三日の一二六一食でした。昨年度の場合は全総数二六、五二一食、平均二九五食でしたから、平均でも一日一二六食増加しております。

増加している原因として、関西新空港建設へむけて労働者が関西へ流れてきているのも一つの要因ですが、中曽根内閣の軍備拡大、福祉、切り捨て政策に依る悪政が弱者切り捨て政策としてもろに現われています。経済大国表看板の裏で仕事にもつけない日雇労働者、寝る所も食べものもない病弱者、高齢者、身障者が野宿を強いられ、炊き出しにならばざるをえない現実があり、彼らを締め出すために公園に金網を張ったりする。病気でも入院出来ず、道端で死んでいった人もいる事実があり、これら労働者をとりまく大阪市の行政機関は人間性に基づいた対応をせず、一方的に差別し排除する。人間に対する視点とは思われない差別、偏見がつくり出されているという現実を見逃してはなりません。

事務所での労働相談は、越冬闘争の三ケ月間で295件をこえています。違法な人夫出し業者に働きに行った労働者の賃金不払い、労災事故もみ消し等の相談に応じることは日常必要不可決なものとなっています。

労働者に権利主張のため西成の住民として生きてゆくためにも「住民票を西成区に」と住所設定のための治動も日常行っています。すでに、一五〇〇名余りの人が釜ケ崎解放会館に住所設定をしています。

身体のぐあいの悪い人に対して主に炊き出し公園で医療券を発行し、大阪社会医療センターで受診された人が12月、一〇〇名、一月九八名、二月六四名、合計二六二名ですが、その内入院者は四四名と極めて少ない人数でした。このように市立更生相談所へ生活保護の申請「病院入院・施設入所」等の闘いを見ても、市立更生相談所が日雇い労働者に対し偏見と差別で生活保護法を無視し、病気の人を野宿に追いやる殺人的行政と思わざるを得

紹介・名古屋

笹島労働者会館

昨年十月二十七日、笹島労働者会館が開設されました。事のきっかけは、越冬医師団から、年間を通しての診療所をつくろうという提案がなされたことです。これが具体化してゆく中で、組合事務所も併設できないか、診療所だけでは、労働者の中に定着しにくいのではないか、その為には食堂も併設してはどうか等々の意見が出され、労働、健康、生活について、できるだけ労働者のニードに応えられるものを目指して、この会館が設立されました。会館は四階建てのもので、一階食堂、二階組合事務所、三・四階診療所となっています。では、これらの状況を一つ一つ見てゆきましょう。

先ず、一階の食堂ですが、労働者に安くて栄養があり満腹できる食堂を目指して開かれました。笹島では、この様な食堂がないからです。開店して半年以上になりますが、安さと量の多さでは定評が

ません。病院入院、施設保護の適用をしない例は日常でも数限りなくあります。

現在、大阪市を相手に退院後の居住保護「生活保護」の裁判を2名の者が続行中ですが、生活保護法30条では居宅保護が原則と定められているにもかゝわらず、施設収容を一方的に押しつけてきています。病気や高齢で働けず恒常的失業者も比較的多くなっている現状です。私達は同じ仲間として倒れてゆく人を見過ごすことは出来ません。現状の続く限り炊き出しを続けてゆきます。これからも越冬闘争の続く限り釜ケ崎の日雇労働者が生きる権利と働く権利の確立をめざしてがんばります。

（釜ケ崎炊き出しの会）

炊き出し数集計表　1985.12.1～'86.2.28

○　日曜日

月／日	合　計	月／日	合　計	月／日	合　計
12.①	289	1.1	750	2.1	455
2	276	2	1,167	②	567
3	271	3	1,261	3	467
4	253	4	577	4	401
5	283	⑤	627	5	365
6	218	6	487	6	330
7	249	7	496	7	330
⑧	291	8	440	8	350
9	293	9	387	⑨	426
10	273	10	354	10	398
11	251	11	261	2.11	426
12	230	⑫	445	12	368
13	214	13	405	13	336
14	211	14	357	14	285
⑮	257	15	464	15	357
16	278	16	374	⑯	470
17	277	17	371	17	377
18	276	18	451	18	293
19	309	⑲	508	19	386
20	345	20	474	20	370
21	392	21	473	21	363
㉒	456	22	457	22	397
23	454	23	480	㉓	445
24	432	24	454	24	399
25	435	25	542	25	382
26	409	㉖	601	26	388
27	460	27	548	27	278
28	592	28	533	28	368
㉙	469	29	610	炊き出し総合計	
30	538	30	523	37,846食	
31	626	31	585	1日平均 421食	

あります。ただ、食事の状況は、寄場での仕事の状況を直接反影しており、二月三日は大変売上げが伸びたのに対し、四月以降は下降の一途をたどっています。このあたりが今後の課題となるでしょう。

次に、組合事務所ですが、労働問題を中心に活動がなされています。組合事務所が会館内にある事は非常に大きな意味を持っています。つまり、組合事務所があるという事で、会館全体の存在が労働者の間に浸透しているのです。このことは、組合活動が、労働者の中で大きく評価されている事のあらわれでしょう。

最後に、診療所ですが、現在、毎週日曜午後六時より、無料診療を行ない、第二土曜にアルコール症の学習会を行なっています。ここを訪ねてくる労働者の数は、そう多くはありませんが、医療班による病院訪問活動と併せ、労働者同志が相互に支え合う関係を目指して活動しています。

まだまだ、活動内容、経済状況共充分とは言えませんが、多くの方々の支援をお願いする次第です。

（角瀬）